

[47] アメリカン・バレエ・シアター考

～新しい質感の時空～

1999年7月23日 東京新聞 夕刊

二十世紀はいろんな意味で世界が狭くなったが、バレエという舞台芸術もいまや世界中に行き渡った。もともとバレエは、十六世紀フランスの宮廷で成立した時から、諸民族が集うインターナショナルな性格をもっていたのだが、しかし現在のように広まってしまおうと、これはもう国際交流のレベルをこえて「世界は一つ」のイメージそのものである。

七月初めに来日したアメリカン・バレエ・シアターも、さまざまな国籍のゲスト・スターを迎え、どこの国のバレエ団だったか、一瞬とまどってしまっただけだ。主役クラスで目立つのはグルジア出身のアナニアシヴィリ、ウクライナ生まれのマラーホフ、イタリアのフェリ、アルゼンチン出身のポッカ、キューバ生まれのカレーニョなどなど。ジャフィーやケントといったアメリカ出身のスターもいるが、しかし人気と知名度ではやや影が薄い。

しかしそのような国際化のなかで、それぞれのバレエ団が個性と特色を失っていくかといえば、けっしてそんなことはない。むしろ独自の性格を出すことにこそ最大の努力をはらっている、と言ってもいい。

[47] アメリカン・バレエ・シアター考

～新しい質感の時空～

1999年7月23日 東京新聞 夕刊

そのための方策の一つは、レパトリーのそろえ方にある。今回のアメリカン・バレエ・シアターの公演でも、「オープニング・ナイト特別ガラ」や「オール・アメリカン・ガラ」では、アメリカらしい作品でアピールしようという苦心のほどがうかがわれた。

たとえばポール・テイラー振り付けの『エアーズ』は、シンプルなコスチュームで動きにもむだな装飾がなく、軽快なリズム感が原始の鼓動のように立ち上がってくる。十九世紀までのいわゆるバレエ風のエレガンスとはぜんぜん違う、新しい質感の時空だ。

またトウイラ・サーブの『ブッシュ・カムズ・トゥ・ショヴ』は、ジャズっぽくくずした身のこなしが何とも軽妙である。この作品は英国ロイヤル・バレエでもパリ・オペラ座バレエでも取り入れているが、これほど嫌味なくさりりと踊れるバレエ団は他にない。

テイラーにしてもサーブにしても、また水兵服で踊る『ファンシー・フリー』を作ったジェロム・ロビンスにしても、アメリカのバレエにとつては国の財産ともいえるべき振付家である。しかし肝心なのは作家や作品それ自体ではなくて、こうしたレパトリーをアメリカ人のダンサーたちが

[47] アメリカン・バレエ・シアター考

～新しい質感の時空～

1999年7月23日 東京新聞 夕刊

踊るとき、いわば生地そのものの、まったく力みのない自然体の個性が輝きわたるとのことだ。

ところで、そうした個性的なカラーやスタイルは、アメリカ独自の作品を踊るときにのみ発揮されるのではない。たとえば今回、別のプログラムとして上演されている古典においても同じことが見て取れる。例を『ロミオとジュリエット』に取ってみよう。シェークスピアの名作をイギリス人のケネス・マクミランが振り付けたバレエだが、第二幕のキャピュレット家のパーティーの場面では、群舞のずっしりした動きが家の格式を表現するのが本来である。しかしアメリカン・バレエ・シアターが踊ると、そうはならない。軽やかなスポーツ集会のようになってしまふのだ。そしてその晴れ晴れした雰囲気もまた、なかなか捨てがたいのである。

同じことが『ラ・バヤデール』についても言える。十九世紀のロシアで作られた作品だが、想像上のインドの官能的な身のこなし、あるいはアヘンによる愛の幻影など、情緒てんめんとして息苦しいほどのバレエだと思っていた。ところが今回の『ラ・バヤデール』はじつに明朗で爽やか。しかも後口が悪くない。

[47] アメリカン・バレエ・シアター考

～新しい質感の時空～

1999年7月23日 東京新聞 夕刊

問題はおそらく、各バレエ団の個性がそれ自体
いいとか悪いとかいうことではなく、もはやどれ
が正統かということでもない。そうではなくて、
全世界にバレエが広まった現在、それが踊られる
土地柄によって、一つの作品にも多種多様の表現
があつて当然だということなのだ。そしてそれら
を、ちょうど世界のワインを利き酒するように、
いろんな見分けをしつつ賞味するのが、これから
のバレエの楽しみ方になるのではないだろうか。